「旅鳥逍遥」５．北アフリカ、オセアニア 編

YUWV 九州支部　加 藤 征 治（文理、S41 年卒）

本編での北アフリカはエジプトとモロッコ、オセアニアはオーストラリアとニュージランドの合計４ケ国である。

エジプト

（エジプト・アラブ共和国）

アフリカ探訪は北アフリカのエジプトとモロッコのみで、その後身辺の変化で中央・南アフリカのサファリランドの旅は夢と消えた。今回報告するはエジプトの旅は、悠久と流れるナイ川とその周辺にある数々の遺跡めぐりであり、時期は真冬２月、成田からエジプト・ルクソールまで空路直便（約 15 時間）である。

図１　ルクソールの朝（ホテルの壁画）・旅の始まり、ナイル河畔の朝（右）

北緯 25-30°のアスワン・ルクソールーそして首都カイロはさすがに暑い。しかし、この時期、ナイル川の船上は涼しく快適である。今回は母船から ボートで東西の対岸へ向かうだけで、朝夕のヨットクルースは楽しい（図２）。

図２　エジプト・ナイル川岸の風景、ファルーカ（木造の帆船）遊覧

エジプト南部・ナイル川東岸に位置するルクソール（テーベ、古代エジプト都市）は紀元前 16 世紀頃に古代エジプト王国の首都となり繁栄した。ルクソールの町の中心にルクソール神殿があり、神殿の壁には、ラメセス２世の戦勝レリーフも多くある（図 3）

図３　ルクソール神殿とラメセス２世の戦勝レリーフ、聳え立つオベリスク２本の内もう１本は現在パリのコンコルド広場にある。

また、その北にはカルナック神殿（図 4）があり、これは複数の神殿で構成されており、エジプトでも最大規模の遺跡である。これらエジプト新王国時代に繁栄した聖地『古代都市テーベと墓地遺跡』は世界文化遺産となっている。

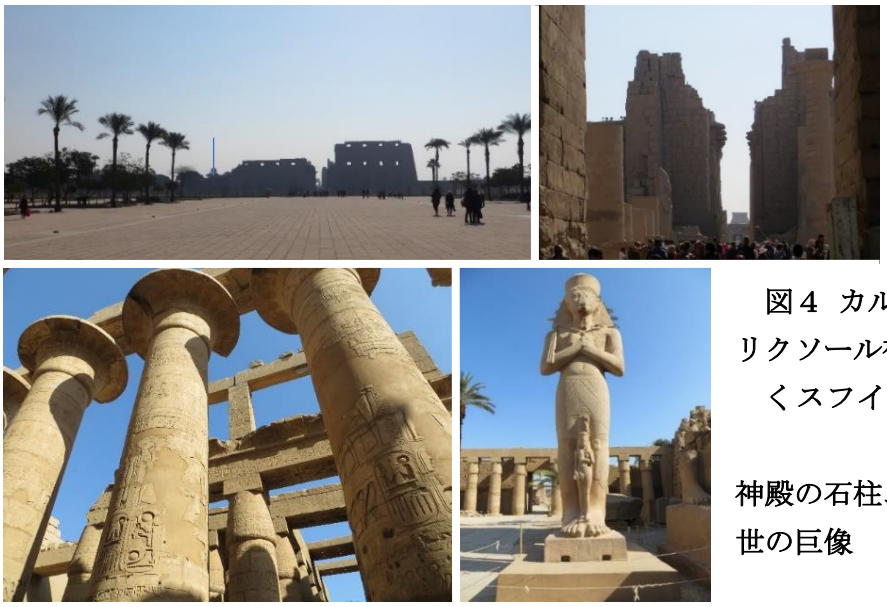


図４　カルナック神殿リクソール神殿から続くスフインクス参道、神殿の石柱、ラメセス２世の巨像

東岸でナイルに突き出た丘の上に建つコン・オンボ神殿（図５）はナイル川のフルーカ（木造の帆船）やクルーズ船からよく見える。その名はアラビア語でオリンポスの丘と言う意味である。

図５　高台に建つコム・オンボ神
（左手前はナイル・ファルーカクルーズ）

ルクソール西岸に渡るとそこは死後の世界へと続く死者の町（ネクロポリス・テーベ）と呼ばれ、中王国時代（紀元前 2000 年頃）以降、多くの墓所が造られた。西岸遺跡の入り口にあるのが２体のメムノン座像である（図６）。

図６メムノン座像

新王国時代（紀元前 1500-1000 年頃）に造られたツタンカーメンの眠る「王家の谷」と、南西に少し離れて「王妃の谷」と呼ばれる墓がある。歴代の王ファラオたちは、墓あらし（盗掘）を逃れるため深い谷を掘り下げて墓を建てた（図７）。地表から階段を下りて前室などを経て石棺にたどり着く。

図７ 王家の谷の墓の入り口

王家の谷の近くには岸壁の斜面を利用して造られた三階建ての壮大で美しい女王の建築物としてハトシェプスト女王葬祭殿（図８）がある。ハトシェプストはエジプト初めての女王である。

図８ ハトシェプスト女王葬祭殿正面、ハトシェプストの顔をしたオシリス神像（何故か、皆腕組みしている）

さらに、西岸には保存状態のいいホルス神殿（図９）がある。強大な塔門は東岸の列車からも眺められる。

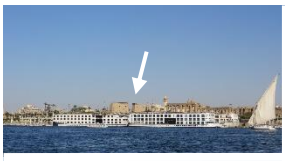


図９　ホルス神殿　外庭からみた巨大な塔門、クルーズ船からも見える（左上、矢印）、塔門入り口（中）、ホルス神の活躍を描いたレリーフ（右）

クルーズ船による旅はナイル川をさかのぼり、ナセル湖のアスワンダムへ向かつた。アスワンは花崗岩の産地で、ギザのピラミット（後述）の石ころもここから搬出された。現在緑と砂漠の調和した美しい町で冬のリゾートとされている。

次の日は早朝アスワンよりアブ・シンベル往復バス約 270km の旅である。目的はアブ・シンベル神殿で、車窓から蜃気楼を見ながら、ただひたすら砂漠の道路を走り続けた（図 10）。

図 10 アスワンからアブ・シンベルへの砂漠の道、蜃気楼（中）、オアシス休憩（右）

アブ・シンベル神殿（図 11）は 1813 年半分以上砂に埋もれた状態で発見され、アスワンダム建設時に水没の運命にあった神殿で、ユネスコの国際キャンペーンにより救済された。『アブ・シンベルからフィラエ間のヌビア遺跡』（世界文化遺産）誕生のきっかけとなった遺跡群である。

図 11　アブ・シンベル神殿、高さ 20m のラメセス２世像が並ぶ

アブ・シンベルからアスワンへ戻り、その日は船泊し、翌日首都カイロまで空路約２時間少々で夕方カイロ市内のホテルに着く。エジプトと言えば誰の印象もピラミッドであるが、ホテルの窓越しにピラミッドが見え、その夜は少々興奮、明日への期待が深まった（図 12)。

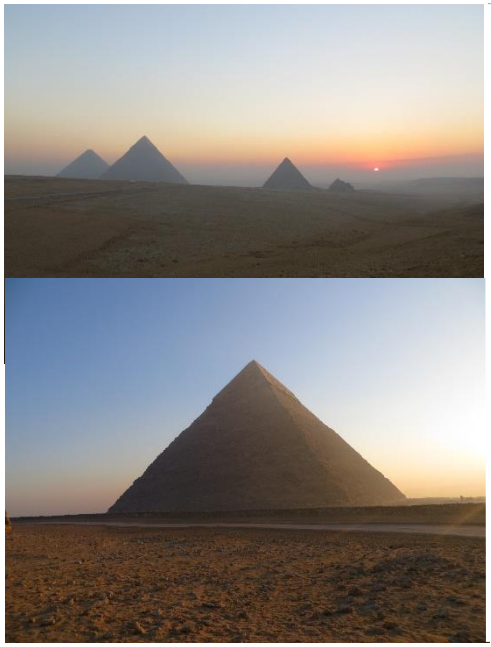
図 12 アスワン上空（左)、カイロのホテルからのピラミッド遠望（中、右）

夜は観光のオプションで、ギザでの「ピラミッドの音と光のショー」(図 13 上)を楽しんだ。翌日は夜の開けないうちから再び車でギザに向かい、前夜のショー会場（図 13 下）を経て朝焼けに染まるギザの三大ピラミッド群（クフ王・カフラー王・メンカウラー王）を眺めた。

図 13 ギザのピラミッドとスフインクス
上:前夜の「音と光のショー」の会場、近くにライトアップされたスフインクスがよく見える。
下：夜明けの当会場

夜明けとともにも現れるピラミッド･三角錐群は素晴らしい眺めである(図 14 左)。ひときわ大きなクフ王ピラミッド(現在高さ約 137m）（図 14 右）への入場は、早朝で比較的観光客が少ない時間帯であった。それでも狭いトンネルを背中を屈めながら上・下降で譲り合い、何もない王の玄室まで登り、折り返し帰還した。古代エジプトの象徴的な建造物のピラミッド群は、メンフィスを都として栄えた古代王国時代（紀元前約 2600-2100 年頃）に建設されている。これらのピラミツトグ群と墓地遺跡『ギザからダハシュール間のピラミッド地帯」』はエジプトの世界文化遺産とされている。ちなみに、エジプト全土のピラミッ

ドの数は、ウィキペディアによると 2008 年まで 138 基発見されているが、その後も発見され、またピラミッドと疑われる遺構も数多く見つかり、その数は不確かである。また、エジプト南部からスーダン北部のナイル川流域のヌビアと呼ばれる地域に散在するピラミッド群で、エジプト文明を取り入れたヌビア人王国の遺跡『ゲベル・バルカルとナパタ地区』は、隣のスーダンの世界文化遺産として登録されている。



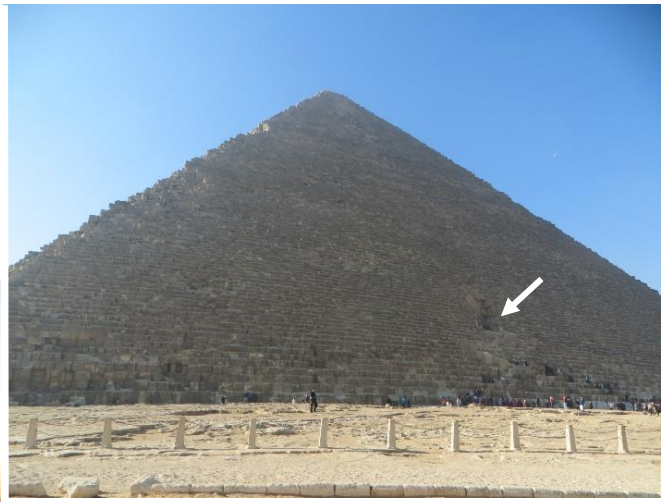


図 14 夜明けのピラミッド群、ギザで最も大きなクフ王のピラミッド、右図の矢印がピラミッド入場の狭い入り口

ピラミッド複合体がきれいに残っているのがカフラー王のピラミッドで、その近くにスフィンクス（図 15）がある。スフインクスはカフラー王の墓の守護の為造られ、顔はカフラー王、身体はライオンの姿で、前足に挟んでいるのが「墓の碑」である。

図 15 朝日を浴びるスフインクス（２か所から撮影）

首都カイロでは、旅の終わりに歴代ファラオの財宝が眠るエジプト考古学博物館を半日見学する（図 16）。博物館の前の広場では、ハトシェプスト女王のスフインクスのレプリカ像が出迎える。目玉はやはりツタンカーメンの黄金のマ

スクであり、黄金の輝きは圧巻である。古代エジプトの数々の宝飾品も魅力的であるがラーホテブとネフェルトの座像やメンチュヘテプ２世座像も面白い。特に後者の座像の足にブーツのようなものを付けているは、下腿の浮腫防止か？（筆者リンパ学研究の独断）。余談だが、アジア編でふれなかったが中国・西安の兵馬俑の兵士も同じようなブーツ？〈下腿の保護〉を着装している。

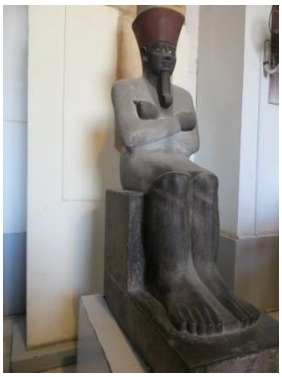
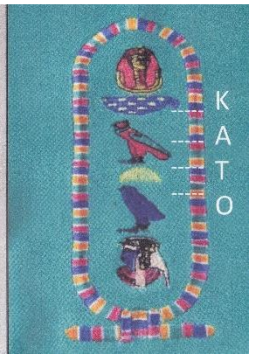


図 16 エジプト考古学博物館（左）、ラーホテブとネフェルトの座像（中）、メンチユヘテプ２世座像（右）

カイロは博物館の見学のみで、残念ながら美しいミナレット（モスクなどに付属する塔）の林立する中世の面影を残す街・『カイロ』（世界文化遺産）や太古の海洋生物の姿が蘇る砂漠地帯「『ワディ・アル・ヒタン（クジラの谷）』（世界自然遺産）は見ることはできなかった。

今回のエジプトの旅は上述のように神殿祭壇や墓碑の見学が余りにも多く、複雑な行程でどれがどこの神殿で、興味深い壁画・レリーフがどこのものか聊か混乱し、執筆にあたり雑な記録を反省する。以下、写真（図 17）を追加する。

図 17 朝日に輝くナイル川とギザの遺跡。ファルーカとコム・オンボ神殿の遠望（左）、朝日に輝くスフインクスとピラミッド（右）



ヒエログリフとカルトーシュ（下）
古代エジプトで使われていたヒエログリフの文字（記号、中は命の鍵）の１つで、もともとロープの象形文字である。
ちなみに右の記号は筆者の名前を記した T シャツ（オーダー）の KATO の文字である。
（注　OB 通信「生命の鍵」既報）

モロッコ（モロッコ王国）

モロッコの旅は羽田→ドーハ→カサブランカのコースで、航空所要時間は 20 時間を超える長旅である。カラブランカに着いて、以下図 18 のように、モロッコを時計回りに駆け足（６日間）で回った。

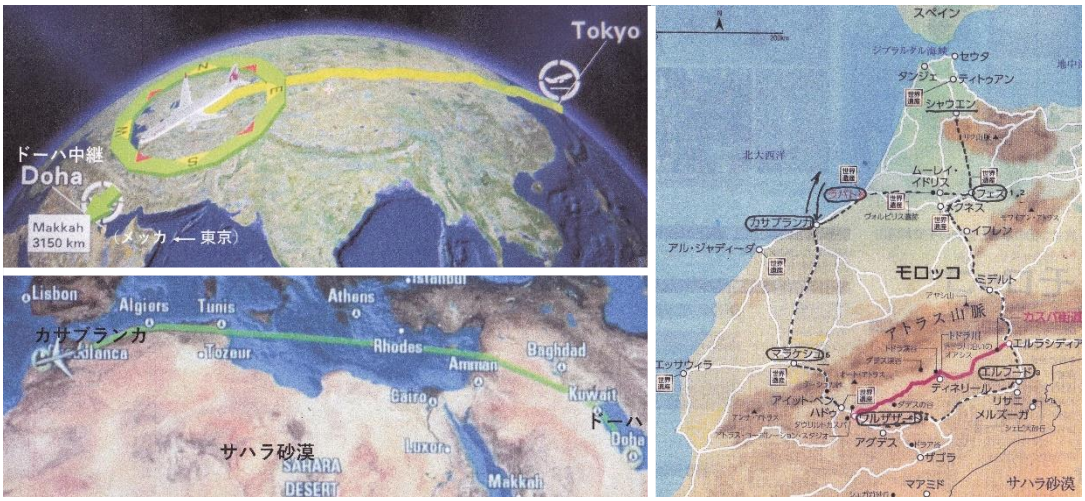


図 18 東京（羽田）→ドーハ→カサブランカのフライト（左）、モロッコ旅程（右）

到着後カサブランカからバスで首都ラバトへ向かった。首都とはいえ商業都市のカサブランカ（後述）と比べて静かな「庭園都市」といった雰囲気である。中心はムハンド５世の霊廟とハッサムの塔である（図 19）。

図 19 ムハンド５世の霊廟（左）とハッサムの塔（右）

翌日フェズから北へ車で約４時間、山間にある「青の街」と言われる人気のシャウエンに行く。山の斜面にへばりつくように建つ白壁の家の屋根に塗られた青のアクセントが目立ち、メルヘンチツクである（図 19）。

図 19 青い屋根と白壁の家の並ぶシャウエンの町

フェズの町の旧市街地は、モロッコ最初のイスラム王朝の都で、世界一複雑な迷路の街とされている（図 20）。宗教と学問の中心地として発展したこの迷路の『フェズ旧市街』地はモロッコの世界文化遺産である。街には今でも昔ながらの染色がおこなわれているタンネリ（フランシ語、なめし革工場）（図 21）があり、その街をタンネリ・ショワラ（革染色職人街）と言う。街にはいろいろな染色の皮製品がある。例えば、カラフルな革のスリツパ（パブーシュ）は女性に人気であり、筆者もお土産に３足も買ってしまった。

図 20 フェズのブー・ジュールド門(左)とフェズ旧市街地（右）

図 21 フェズの街のなめし革染色工場（右）とカラフルな品々（左）

フェズからエルフードに向かう途中、モロッコのスイスと言われるアトラス山脈の中腹イフレンを越える。ヨーロッパの田舎風のような趣のある町である（図 22）。

図 22 イフレンの風景

バスは一路後述のメルズーガ砂丘への町エルフードへ向かう（図 23）。ガイド誌によると、アトラス山脈はモロッコを大きく２つに分けるという。北側のマラケッシュ、フェズといった大都市「城壁とメディナ（旧市街地）の世界」と南側のサハラ砂漠へと続く「カスバ（城塞）とオアシスの村々」である。なお、アトラス山脈の名とそのエピソードについては、この「旅鳥逍遥」シリーズ第２編のポルトガルの教会の屋上像の説明にも記した（詳しくは自著「おもしろ解剖学読本、改訂４版、2004）」参照、

図 23 エルフードへの道、アトラス山脈を望む

アフリカ大陸西の果てに、天空を支える如そびえ立つ山脈を見ると“アトラスの神話”になぞらえてアトラス山脈と名付けられたことを納得する。

かねてからサハラ砂漠の片鱗でも見たいと期待して、早朝アルジェリアとの国境に近いメルズーガ砂丘へ向かった。乾燥して空気も澄み切り、周りに光のない砂漠の星空は素晴らしく、まるで宝石のような輝きである。まだ周りも暗い早朝に、初めてラクダの背に乗り、砂漠の王子様気取りである。しかし、現実は落ちないように把手にしがみつき（落ちたら、落駱駝！）、念願の「月の砂漠」を歌う余裕もなく、やっと手放し！地元の親切な現地のベルベル人ガイドに惹かれてゆらゆら！夜明けとともに現れる起伏のある砂丘を小一時間程度散策した（図 24）。

図 24 サハラ砂漠の西端、アルジェリアとの国境にあるメルズーカ砂丘でラクダに乗る。

砂漠の夜明け・朝日が昇る（左）、ベルベル人と記念撮影（中）、砂丘の落書き（右）

翌朝、エルフードからトドラ渓谷を通りワルサワードへ、旅の印象を１枚の炙り絵で表すと図 25 のようである。この炙り絵はモロツコ・ワルザワードの西で日干し煉瓦で造った要塞化された村アイト・ベン・ハッドゥでの現地人の作品である。イスラム勢力から逃れてきた先住民のベルベル人たちにより小川のほとりの高台に築かれ要塞の集落跡『アイト・ベン・ハッドゥの集落』は
世界文化遺産に認定さている。

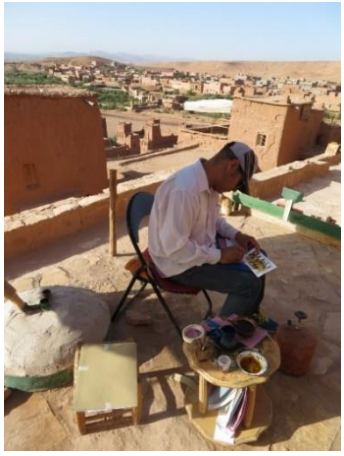


図 25 ワルサワードの近くの『アイト・ベン・ハッドウの集落』の炙り絵

旅はいよいよモロツコを代表するエネルギッシュなマラケシュに入り、観光名物であるスーク（市場）歩きを楽しんだ。モロッコ最大規模の『マラケシュ旧市街』（世界文化遺産）は昼夜活気を見せている（図 26）。人気のモロッコ料理と言えばタジン（鍋）と呼ばれる厚い陶製の三角錐の鍋による煮込み料理である。具材は基本的には肉(鶏・豚・牛・兎)や魚と野菜である（図 27）。

図 26 夜活気を帯びるスーク（市場）

図 27 モロッコ名物タジン鍋（上）とクスクス（下）

旅の最後のカラブランカでは、1986 年から８年がかりで 1993 年に完成したモロッコ最大のモスク、ハッサン 2 世モスクを見学した。当モスクは 20 世紀最高の芸術品とされている。大西洋に浮かび上がるような巨大な建築であるが、神学校や図書館・博物館も併設されている。信仰の為、これだけの施設が国民の

寄付と税金により建てられていることには感嘆する。

図 28 カサブランカのハッサン 2 世モスク

モロツコ余話

なお、モロッコ探訪の最初の動機は、古い映画フアンには人気のアメリカ映画古典的作品「カサブランカ」（1942 年）である。1940 年代、当時仏領モロッコのカラブランカはヨーロッパ各地から自由を求めて渡米（ポルトガル・リスボン経由）しようとする人たちで賑わっていた。その頃のドラマである。撮影は戦火のヨーロッパを避けて、ニューヨークで行われたそうであるが、カサブランカの街が忠実に描かれている。今はどこの国のビジネス街とも変わらない近代都市であるが、スーク（市場）に行くと、昔の生活を垣間見ることが出来る。ガイドブックに、「モザイクのような都市」という表現をみつけて納得する。

上：
・メルズーカ砂丘
・街の売店のラクダ

・マラケッシュ・スーク（市場）のコブラ使い
下：スーク店頭の品々と帽子をかぶった“マラケッシュ風の男”（筆者）
熱いマラケッシュの街のガソリンスタンドの広告塔

オーストラリア（オーストラリア連邦）

オーストラリアと言えば、その名を音楽の都ウイーンでよく知られるオーストリアと間違えやすいが、その名はラテン語の南の大陸（Terra Australis）からきたと言われる。古い名は欧州に対して豪州である。ここは南半球なので、日本では見られない南十字星が輝き、季節が日本と“あべこべ“(真逆）である（図29)。大陸の形が四国のようでも，県で言うと山口県や福島県と似ているが、国土は日本の約21倍、アラスカを除いた米国とほぼ同じである。

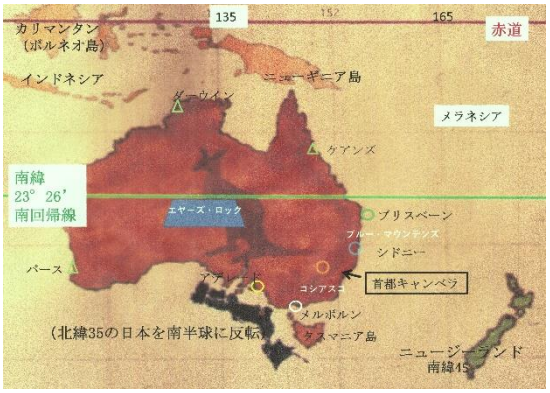


図29　南半球の星空・南十字星（キャンベラ共同研究者撮影・提供）(左)、
南半球オーストラリア大陸の地図（日本とあべこべな国）(右)

オーストラリア大陸台地には東海岸地帯（首都キャンベラ付近）にオーストラリアアルプス（スノーイ・マウンテンズ、コシアスコ国立公園の一部）と呼ばれる山並みはあるが、欧米に比べて高い山ではなく、広大で深い山という印象である。コシアスコ国立公園の山岳地帯には最高峰コシオスコ山(Mt.Cosciusk、2,195m)は山岳・森林・湖水のある景勝地である。筆者はかってオーストラリア留学で首都キャンベラに滞在中（後述)、夏と冬の二度の休暇で、そのコシオスコ山に登った（図30、31)。大陸の大地はまさにロックの地形で、奇岩が多く面白い。夏山の縦走路の残雪は日本と異なり南斜面にあるので、時に方向感覚を疑う、まさに“あべこべ”の風景である。冬の延々と続く雪原も壮大で、山脈の懐の深さを感じさせる。

図30 オーストラリア・アルプスのコシアスコ国立公園（山行地図と夏山）

図 31 オーストラリア・アルプスの夏（ロック）（上）と雪原の落書き- Seiji in Australia

湾港都市シドニーはオーストラリア入国の窓口でもあるが、最も年代的に新しい建造物（1973 年完成）オペラ・ハウスが有名である(図 32)。風をはらんだ帆を思わせる形状は構造ともに独創的な建築として高く評価され、『シドニーのオペラ・ハウス』として世界文化遺産に登録されている。

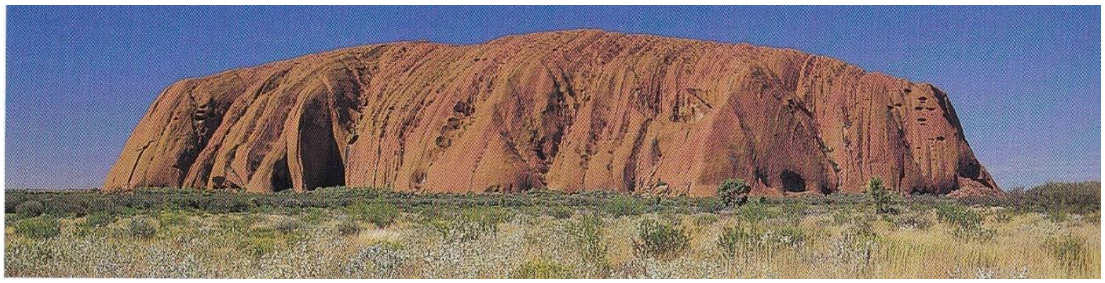
図 32　シドニーのオペラ・ハウス（上）とハーバーブリジ（左下）

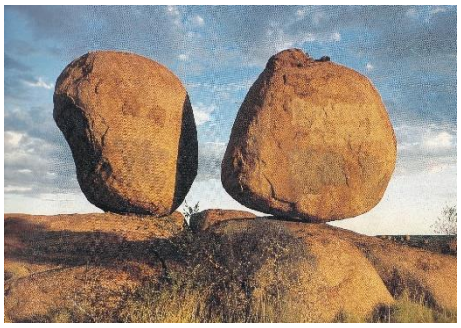
シドニーの北には、90 種を超えるユーカリの茂る森の有名なブルー・マウンテンズ・『ブルー・マウンテンズ地域』（世界自然遺産）がある。そこにはかっての先住民のアボリジニの伝説に基づいて「スリーシスターズ」と呼ばれるジャミソン渓谷の奇岩がある(図 33)

図 33 ジャミソン渓谷と原住民アボリジニの伝説に基づく「スリーシスターズ」と呼ばれる奇岩

また、シドニー北の海岸線は美しく、ブリスベーン近くには世界的に有名なオーストラリア最大の保養地ゴールドコースがある。さらに北のケアンズの近くには多種多様な生命を育む世界最大・日本列島がすっぽり入るぐらいの大きさの大サンゴ礁の『グレート・バリア・リーフ』（世界自然遺産）がある。

オーストラリアは大陸の東部と西部は都市が発達しているが中央内陸部は大部分が砂漠地帯で、「エヤーズ・ロツク」(図 34)という高さ 348m、周囲 9.4km もある巨大な一枚岩がある。その「エヤーズ・ロツク」のある『ウルル、カタ・ジュター国立公園』は、アボリジニの有名な聖地で、世界複合遺産となっている。





“中央オーストラリアを訪ねずして、オーストラリアを語らずべし”と言われるほど、エヤーズ・ロツクは確かにオーストラリア大陸のシンボルのようなものであるが、残念ながら未だ訪問の機会がない。図 34 中央オーストラリア大陸のエヤーズ・ロック（写真誌引用掲載）

今回のオーストラリア逍遥で、訪ねたのは大陸のほんの一部、図 29 右の丸印の都市のみである。まだまだ西海岸の都市パースや北のダーウインやケアンズなど魅力ある都市（図 29 右△印）やタスマニア島『タスマニア原生地域』（世界複合遺産）他世界自然遺産がなど訪ねてみたい処は多いが、世界の状況と体力の低下（老化）など諸事情で困難な状況である。

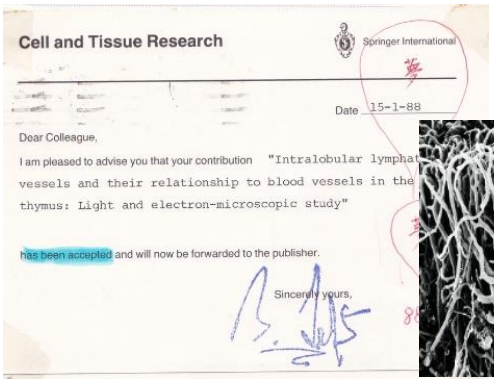
オーストラリア番外編

先年にも既に話したことであるが、筆者の海外デビューは比較的遅く、1984 年 10 月のオーストラリア留学が初めての海外である。成田を JAL 国際深夜便で飛び発ち、シドニー着前（メラネシア上空）で目覚めた時、初めて朝日が機体・座席の下から射しこむことを見て高空にいることを実感し、未知の明日へ期待と不安で興奮した。今思い出しても胸が熱くなる筆者の人生劇場である。以下、 記憶の一枚一枚である（図 35）

図 35-1 旅鳥初飛行―シドニーへ

図 35-2　オーストラリアのシンボルレリーフ（キャンベラの国立植物園正門）、オーストラリアを象徴する黄色いワトル花と、後すざりしないカンガルーとエミュー（左）当時オーストラリアで初めて見た花（ワトル、ボトル・ブラッシュ、カンガルー）

図 35-3　若き日、カンガルーと遊ぶ(左)、ある年のキャンベラのブッシュファイヤ（大規模な森林火災)、当時、宿舎からパスポートを持って非難した。オーストラリア生息の珍しい有袋類カモノハシ


Cell and Tissue Research
Springer International
Date 15-1-88
Dear Colleague,
I am pleased to advise you that your contribution "Intralobular lymphat
vessels and their relationship to blood vessels in the
thymus: Light and electron-microscopic study"
has been accepted and will now be forwarded to the publisher.
Sincerely yours,

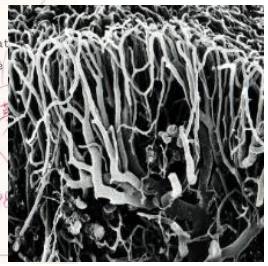


図　35-4

ちょっとだけ研究にも専念した。その成果は後年、免疫の中枢である胸腺の毛細血管網の電子顕微鏡観察の論文として国際誌に発表した。右図はその時のレフリーからの論文査読終了・受理の通達と掲載写真で、研究の夢が広がった。

ニュージランド

初めてのニュージーランドは、シンガポール航空で福岡→シンガポール経由（6 時間 35 分）→クライストチャーチ（９時間 45 分）の旅で、早朝入国（図３６）。クライストチャーチからの車窓から広がる羊の大地(図 37)に湖の水の青さと遠くの雪山の白さに目を奪われ、バス走行 226km、3 時間 15 分の疲れも忘れて夕方テカポ湖に到着する。

図 36　南半球の夜明け

図 37 羊の大地（白はすべて羊）

湖の傍に立つ羊飼いの教会は周囲の風景となじみ、どのガイド誌にも映る風景である。この地は夜の満天の星座鑑賞の最高のポイントである。その日はテカポ湖畔のリゾート気分が満喫できる５つ星ホテルに泊まる(図 38)。

図 38 テカポ湖畔、善き羊飼いの教会（右上)、湖畔ホテル「ペパーズブルーウオーターレイクテカポ」(左下)、夜の満天星座（左下、ガイドブック写真より転載)。

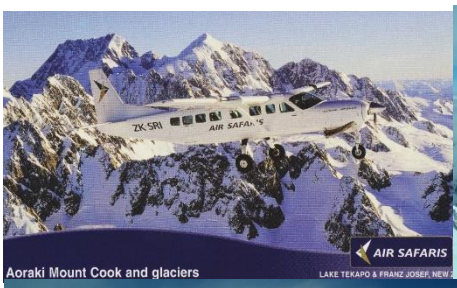
テカポ湖からマウントクック国立公園に向かう途中のプカキ湖からのマウント・クック地区の山並みは素晴らしく、湖の色はいずれも深い青色のバスクリーンを流したように空の青より濃い（図 39）。

図 39　マウントクック国立公園向かう道中（車窓より）、マウント・クック地区の山並（上）、プカキ湖畔（下）

「マウント・クツク遊覧飛行参加」への期待が深まった。遊覧飛行の飛び立ちには風が不安であったが、上昇と共に羊の群れが見え、「人より羊の方が多い国ニュージーランド！」を納得する（図 40）。

図 40　遊覧飛行上空の驚き、大・小いろいろな色の湖（左）、眼下に点々と羊の群れが見られる（右）

遊覧機のサービスは良く、マウント・クック（マリオ名：アオラキ Mt.Cook、3,724m）へ近づいてくれたので、夢中でシャツターを押した（図 41,42）。このニュージーランド南島南西部に残る雄大な自然国立公園・保護区:前述の国内最高峰の山「マウントクック」、後述のフィヨルドの海「ミルフォードサウンド」、氷河の影響受けた地形「テ・ワヒポウナム」などは、『テ・ワヒポウナム』(総称)として世界自然遺産で登録されている。なお、北島には３つの活火山が聳えるマオリの聖地『トンガリロ国立公園』（世界複合遺産）もある。



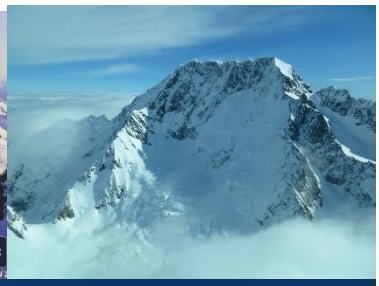
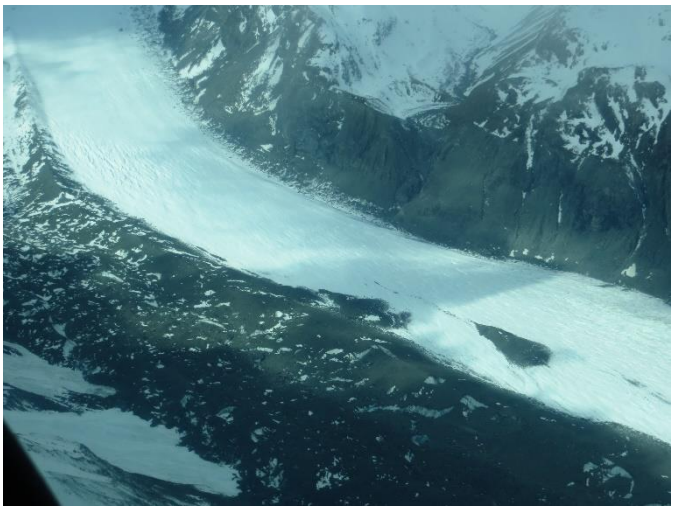


図 41 遊覧飛行(左)からの眺め、筆者が機上から撮った渾身の激写・マウント・クック（Mt.Cook）の雄姿（下）エレベスト初登頂のサー・エドモント・ヒラリーが登山技術を磨いた山でもある。

図 42　ニュージーランドの氷河、Mt.Cookno 麓を被うタスマン氷河



クイーンズタウンから 307km、車で 6 時間の往復で、フィヨルドランド国立公園・ミルフォードサウンドを訪ね、ミルフォードサウンドクルーズを楽しんだ(図 43)。

図 43　ミルフォードサウンド、水面を打つ水の迫力・ボーエン滝（右下）

オマラマという小さい牧場町で、羊の毛刈りショーを見学する(図 45)。

図 44　羊の牧場と毛刈り、ぬくぬくした毛皮の姿も刈るとすっきり！

「羊が山羊になった！」と誰かの声。